

国際防災・人道支援フォーラム 2004: 「大災害を語り継ぐ」

2004年2月8日

河田 恵昭

国際防災・人道支援協議会会長

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長

議長総括

<フォーラム参加者、国際防災・人道支援協議会構成員 作成>

神戸東部新都心(HAT 神戸)に立地する12の防災関係機関で構成する国際防災・人道支援協議会(DRA)と兵庫県は、平成16年2月8日(日)神戸国際会議場において、約250名の参加者を得て、「大災害を語り継ぐ」をテーマに「国際防災・人道支援フォーラム2004」を開催した。

フォーラム参加者と国際防災・人道支援協議会構成員は、総意の下でこのフォーラムの成果を下記のとおりとりまとめた。

記

1. なぜ「語り継ぐ」のか?

1995年の阪神・淡路大震災で被災地の人々は、極めて強い怒り、恐れ、悲しみ、心の痛み、罪悪感を心に抱いた。無念にも亡くなった人々の最後の苦しみ、叫びについては知ることすらできない。震災への対応、復旧・復興の過程において人々は、災害への備えや防災の取り組みが足りなかったこと、良くわからない状況でせざるを得なかった誤った選択などについて深い後悔の念を抱いた。他方、悲惨な状況にもかかわらず、思いがけずコミュニティの暖かさや人々のやさしさ、いのちの尊さなどを感じることもできた。

阪神・淡路大震災以降わが国では、各分野においてコミュニティレベルから国の政策レベルに至るまで多くの重要な改善がなされた。このように防災に向けた具体的な取り組みが数多く進められてきたのは、人々が震災後に抱いたさまざまな強い思

いに突き動かされてきた結果であり、それに伴う責任感のなせるわざであった。この災害は、ボランティア活動を強く刺激することとなり、日本全国に非政府組織（NGO）団体が設立する契機となった。

防災・危機管理の政策や活動を進めるにあたって、そのような強い思いを維持することは極めて重要であり有効なことである。甚大な災害に関する生の経験や教訓が適切に語られ伝えられる場合、それらは防災政策及び活動を進めるために、個人、地域、関係機関の一人ひとりがそれぞれ具体的な行動をとるよう動機付けするにあたって大変有効な方法である。このような熱意によってこそ防災の取り組みが進むのである。

しかし一方で、このような思いは容易に風化する。多くの一般市民はむしろ災害時のつらい経験や気持ちなど早く忘れて通常の生活に戻りたいと願うのである。したがって、大災害後の強い思いを維持し、市民一人ひとりが、また社会全体としても、防災の取り組みを推進することができるための何らかの仕掛けが必要である。このような中で、当フォーラムでは「語り継ぐ」ことの重要さや有効性を議論することとした。

2. 効果的に「語り継ぐ」ための視点

今回のフォーラムの事例紹介やディスカッションを通じて、日本、バングラデシュ、トルコ、イタリアそして国際的な過去の災害の経験や教訓から、下記の重要な視点が示された。

- ・人々は、災害の経験や知識のある人の話を聞くことにより心を動かされる。「語り継ぎ」により、ひとの経験を感じとり、自分で何か行動に移す動機となる。
- ・モニュメントや記念公園などは確かに有効な「語り継ぎ」の手法であるが、それだけでは不十分で、メッセージも同時に明確に伝えられなくてはならない。そのための最も効果的な手法は、学童に漫画、映像、音楽、絵、写真、物語などにより伝えることである。子供に伝えれば、その家族や地域にまで広がっていくこと

になる。

- ・政府、団体、地域のそれぞれの社会は、安全なまちとするための一つの文化を育成する責任がある。このような社会におけ安全のための文化により、人々は過ちや無関心から脱却し、建物の耐震強化などを進めることにつながっていく。たとえば、どんな予防措置を講じていても家が壊れれば命を失うことになるため、耐震性を有しない家は順次更新していくか、一刻も早く耐震補強を行うべきである。安全のための文化は、様々な防災教育、家具の転倒防止や地震保険などの平時の事前準備も含んだものである。
- ・災害による死者・けが人を減らし、損失を最小限にするために、個人レベルから政策決定者までが一体となって共同責任を負うように、地域の個人や組織を啓発していくことが不可欠である。このような地域的な取り組みに対しては、政府組織が主導的に推進し、支援していくことが必要である。
- ・これからの災害にも通じる教訓をより明確に理解するには、過去の災害を再度検証することが重要である。それにより、過去の教訓は今日必要とされる知識に効果的に移転されることになる。
- ・被災地は、その経験と教訓を発信していく責務がある。もっとも危険なことは、その教訓を忘却して失ってしまうことで、それは次の世代を危険にさらすことになる。このような教訓の継承は、将来の災害の減災、予防に向け、きわめて重要なことであり、危機管理の最も重要な項目の一つである。
- ・災害の死者などは、統計的に処理されるものではなく、一人一人の死が積み重なったことである現実を認識すべきである。
- ・適切な手法や技術を活用して、大災害による生きた経験や教訓を認識し、把握し、移転し、活用していくことが可能となるシステムを構築することは、国際的にも、またコミュニティ、地域、国においても重要なことである。
- ・これまで災害経験がなかったり、あるいは自分には災害は降りかからないと盲信

- していることにより、災害に対する危険があるにもかかわらず、災害認知度に対する温度差がずいぶん存在している。このような人たちに対して、生きた教訓を伝えるには、映画、漫画、文化的な催し、マルチメディア情報サイトなどの親しみやすい手法により、安全・安心についての常識的な感覚が身につけられる手法を取り入れることが重要である。
- ・ 高齢者、障害者、子供、少数民族、生活困窮者などの災害弱者対策も十分考慮する必要がある。災害発生時に彼らが何を必要とするのかについて、また、災害発生後の自助・共助・公助の仕組みについてもっと考えるべきである。
 - ・ 日本においては、神戸やその周辺地域の市民により、様々な語り継ぎの取り組みが行われてきた。その一つが、兵庫県による人と防災未来センターの設立である。1995年の阪神淡路大震災で、一体何が起こったのかを示すリアルな再現映像は、市民から提供された写真、実録映像、瓦礫、個人の手記やメモとともに展示に用いられている。センターには語り部が常駐しており、実際の体験談を来館者に語りかけ、双方向にコミュニケーションをとっている。
 - ・ 人と防災未来センターの機能は、記念碑的な性格を有するだけでなく、災害による被災者の記憶を風化させず、災害の経験を持たない人たちに阪神・淡路大震災の事実を強烈に伝える機能を有している。これにより、センターを訪れた人々が、よりよい未来に向けて、より災害に強い生活環境や社会を築いていくよう思いを新たにすることが期待されている。

3. 国際社会への提言

これまで、地域社会や市民の立場からは大災害の総合的な減災政策が進められてこなかった。しかしながら、1995年の阪神・淡路大震災は、被災者からの視点の重要性をあらためて教えてくれた。「大災害を語り継ぐ」ということは、これからの災害で被災者を少しでも減らすことにつながっていく。このような「語り継ぎ」によって、世界中で大災害が起きても、多くの人々が悲惨な目に遭わずにすむようになることを望んでやまない。

そのために、

- 1 いずれの被災地においても、各国政府や人々は、地域における市民の大災害の「語り継ぎ」を事業化する努力を開始すべきである。それによって過去の悲劇を再び繰り返さずにすむことになるのである。
- 2 「語り継ぎ」を行なうには、展示施設や「語り部」の活動、映像、漫画、音楽、地域のお祭り、その他各種の教育活動など、多くの方法があるが、その最大の長所は、大きなコストをかけなくてもできることである。各国政府や支援機関は、「語り継ぐ」ことの重要性を理解し、これに対する支援を是非始めていただきたい。
- 3 今日の議論の結果を、国際社会、特に国連国際防災戦略（ISDR）事務局に報告する。2005年に兵庫県神戸市で開催される国連防災世界会議（兵庫会議）の準備の過程で、各国及び国際社会において行われる防災政策の議論に、本日の成果が好意的に反映されることを期待する。
- 4 特に、「大災害を語り継ぐ」ため、このサマリーのコンセプトに沿ったテーマで半日程度、人と防災未来センターの見学を含めた国際会議のセッションを、国際・防災人道支援協議会との連携により開催することを検討する。

< 国際防災・人道支援フォーラム 2004 参加者 >

- ・ 井戸 敏三 : 兵庫県知事
- ・ ジョン・ハーディング : ISDR 事務局 科学技術担当調査官
- ・ 室崎 益輝 : 人と防災未来センター上級研究員・神戸大学教授
- ・ 平野 啓子 : 語り部・かたりすと・キャスター
- ・ 村井 雅清 : 海外災害援助市民センター運営委員
- ・ 鐘ヶ江 管一 : 雲仙岳災害記念館名誉館長
(人と防災未来センター客員研究員)
- ・ サイデュール・ラーマン : バングラデッシュ災害予防センター所長
- ・ アーメット・イシカラ : イスタンブールボガジシ大学教授
- ・ アレサンドロ・パスト : イタリア国立研究評議機関研究員
- ・ 住田 功一 : NHKアナウンサー
- ・ イアン・デイビス : 英国クランフィールド大学教授
- ・ 河田 恵昭 : 国際防災・人道支援協議会会長
- ・ 上総 周平 : 内閣府参事官(地震・火山対策担当)
- ・ 黒田 裕子 : しみん基金 KOBE 理事長
- ・ ケネス・トッピング : 京都大学客員教授

< 国際防災・人道支援協議会 >

構成員

- ・ アジア太平洋地球変動研究ネットワークセンター
- ・ アジア防災センター
- ・ 国際エメックスセンター
- ・ 国際協力機構 兵庫国際センター
- ・ 国連人道問題調整事務所神戸
- ・ 国連地域開発センター防災計画兵庫事務所
- ・ 地震防災フロンティア研究センター
- ・ 世界保健機関健康開発総合研究センター
- ・ 地球環境戦略研究機関関西研究センター
- ・ 日本赤十字社兵庫県支部
- ・ 人と防災未来センター
- ・ 兵庫県災害医療センター

オブザーバー

内閣府、外務省、兵庫県、兵庫県国際交流協会、兵庫県立看護大学